炭素循環

atuchan69

一

細かな枝をつたう幽かな震え
桧皮色の樹皮を湿らせ
梢を這う、自動律たる水の脈動))))
沁みゆく荒地の渇きへ
　一滴、
地球システムを孕んだ涙のかたち

そびえ立つ雪山をパノラマに見渡し、
麗らかな陽を浴びた裾野に悠々と雲はながれて
翡翠の大地へちらした群生の青き斑、
妖しい風の草を薙ぐ野辺に
点々と彩るブルーオキザリスの花の一つが
激しい雷を秘めた雲の下に咲き
やがて小さな葉をゆらす大粒の雨、

二

夥しい廃墟を築いた治世と占星術の
氷河を渡る歴史という名の小舟。
血に染まるコンパスの針は小刻みに震え、
アルキメディア螺旋をえがく赤い航路の
古びた因果を残した罪の轍に
つよい憎しみを帯びて一瞬、かがやく
ふたつの呪われた瞳‥‥

――その日、

羽ばたかぬ烏合の巣と個体を
夜の狂風は、「ふうっ」と一息で吹きはらい、
断末魔を叫ぶ若い女の金切り声と
血と骨の瓦礫をまぜた惨劇を海の底に沈めて
やがて波打ち際に残された壊れた都市の
邪な女神である欲望の姿かたちは、
ひとり寂しく海辺に立つと
腐敗したメタンの混じった青白い火炎を吐き、
艶やかに美しく肢体を燃やしながら
ダイヤを散らした夜の空を虚しく仰いだ

こうして銀雲の晴れ間から覗く
凛々しく冷たい崇高な星々の瞬きとともに
豊穣なるアルテミスの月が照らした渚の光景は、
露わな夜の砂浜に打ちあげられた数多の、
大いなる罪の償いである腐乱したムクロたち‥‥

三

そして朝靄の殺戮。

逃げ奔る、ひ弱な人間どもを
幾千匹もの獅子の群れのように吼える
光学迷彩の装甲戦闘車両がさも簡易に轢殺し、
軌む無限軌道に潰された顔と、顔、
ストッキングを被った銀行強盗団みたいな
それぞれに歪んだ形貌の
ひどく醜い顔のクローズアップ――

◆誘導された社会的同意によって
　◇また脅威の創出によって、

聖別された殺戮兵器による残忍な冬が
精緻なプロットに沿ってすべての大地を覆い、
すでに焼かれた街の無惨な屍を踏んで
緑の服を着た七人の小人たちが
小銃を肩に、
「ハイホー、ハイホー!」
歌いながら、
踊りながら、
愉快にメギドの丘をめざす

さあ、復讐と報復を未来永劫にし続けるがよい
痛みには痛みを、屈辱には屈辱を!

――沈黙――

白い横隔膜と黄色い皮脂を覗かせ、
淫らな匂いのする光沢をおびた灰色の臓器と
やたら粘りつく命の嫌らしさが　いかにも豚臭い、
チグハグな人型の生体機械をむりやり縫いあわせて
斯くもけだかき永遠不滅の霊魂は、
さまようゾンビのごとく　腸を長くひき摺り、
ついには気のふれた蛸のように、
自らの肢体を食べてまでも艱難を生延びた

四

すべての死体現象を経て
腐乱した肉に含まれる低濃度のインドールが
独特な花の匂いを漂わせ、
恋人のように触れあう俺とおまえの胸と胸、
遂げた後のように萎えた憎しみと
共に刺しちがえた深い傷が、
互いにいつまでも誇らしく疼いた

広場では、赤く錆びた給水塔が祈りの雨を待つ、
逃れの街には今日も死の灰が降下し、
曠野の果てに転がる生贄の神の偶像と裸の人形たち
朽ちた老木の梢に吊るされた
襤褸の衣が、凍てつく孤独にふるえ
すでに劣化した白いポリエチレンの幽霊たちは、
自由気儘にブリキの屋根の上をとんだ

薄い虹色の油膜に覆われた
ほとんど流れのない汚濁した河を、
それでもみごとに奔る小魚たち))))
いや、それより遥かに生々しく
黒く逞しい魚体が、
俄に、泡をこぼしては水面ちかくで踊った

////

――生きているのか?

失われた心に、人の声がひびいた